

大橋昭一著 『観光の思想と理論』

岡野 英伸

書評

大橋昭一著 『観光の思想と理論』

(文真堂、2010年6月、x +256頁)

Shoichi Ohashi, *Thoughts and Theories on Tourism*, Tokyo: Bunshindo, 2010.

岡野 英伸

Hidenobu Okano

近畿大学経営学部 (専攻分野・観光論)

I まえがき

昨今、ようやく我が国においても、観光に関する議論を日常的に耳にするようになってきた。しかし、評者がこの分野の研究を始めた1990年代半ばでさえ、必ずしも活発な議論が行われていたとは言い難く、当時から15年近く経過してようやく様々な方面から注目を集める分野となってきたことは、感慨深いものがある。しかし、ヨーロッパやアメリカにおける観光研究の進展とは異なり、我が国の観光研究は、未だその緒に就いたばかりであるとの印象は拭えない。我が国の場合、観光の発展を契機とした地域振興、あるいは海外からの観光客誘致による経済効果についての議論が先行している感は否めない。また昨今の、特定の国からの買物客の誘致を目的とした観光政策は、長い目で見た場合、我が国の真の意味での観光の発展にとって、様々な問題を含んでいるように感じてならない。

そのような、観光を取り巻く我が国の社会状況の変化に際して刊行された本書は、観光の持つ経済的側面だけではなく、文化や社会といった経済外的側面にもその研究対象を広げており、その知見と先見性には敬意を表さざるをえない。著者は、観光の理論を形成する上で重要な基礎的理念と、それに基づく実証研究を詳細にレビューしている。

著者がこれまで蓄えてきた、観光以外の研究分野における幅広い知識と分析能力が、本書においても十二分に示されており、今後の観光研究において大いに貢献していくと考えられる。以下で、その内容についての紹介と本書の各章における注目すべき特徴、および若干の論評を加えていく。

II 本書の構成と各章における注目すべき特徴

本書は、全体として11章で構成されている。その各章について以下で紹介していこう。「第1章 観光とは何か—観光の原点」では、ツーリズムとは何か、ツーリズムはどのようにして生まれるのかについて、主たる研究をサーベイしている。その中で著者は、「ツーリズム=見る目の違い論」を提示して

いるJ.Urryの所論をはじめ、ポストモダン論的な「ツーリズム=体験論」や、近年登場した「ツーリズム=資本主義事業論」等を論じ、そのうえで「観光には価値創造性がある」という著者の見解を提示している。

「第2章 現段階における観光の社会経済的意義と発展動向」では、社会全体の中でツーリズムがどのように位置づけられてきたかを取り上げ、ツーリズムの国際的競争力の問題にも触れている。

「第3章 観光の諸形態—周辺地観光・農村観光・都市観光」では、新たなツーリズムの形態としての都市ツーリズムなどを取り上げ、諸議論の様相を紹介している。

「第4章 文化と観光」では、巡礼など、古くからある宗教的ツーリズム (pilgrimage) を、いわゆる「文化的ツーリズム」の一形態であると論じ、文化はツーリズムの議論の中でどのように位置づけられるのか、について論究している。

「第5章 観光客のタイプと行動原理」では、観光客の属性と観光客の行動の違いに関する研究を取り上げ、観光客をいわゆる「観光を消費する人々」として捉え、一般的な商品における消費行動の分析枠組みを、人々の観光行動に適用していくことを試みている研究について論究している。

「第6章 観光客満足理論」では、観光における消費者の満足、つまり「観光客満足」の問題を取り扱っている。その中でも、特に観光客満足と一般的な消費者満足 (CS: Customer Satisfaction) との相違点に注目し、性格的な違いを明らかにしようとしている。すなわちツーリズムは、観光に出発する前の準備過程、観光地への往復交通の過程、観光地での滞在過程、帰宅後の総括的過程など、それぞれの過程が質的に異なる行為であり、したがって、そこで求められる満足 (不満) も、独自に生じると考えられる (要素満足)。しかし、その一方で、観光旅行全体の過程を通じての満足感 (不満) も、観光客には得られるものである (全体的満足)。そういった、観光に特有の満足 (不満) についての分析を行っている研究を精査している。

さらに本章では、観光地振興において、観光客の満足を得るためには、観光地及びそこに関係する場所・施設の充実だけでなく、観光地に至るまでの過程も重要であることを指摘している。つまり観光客は、観光対象以外の場所・施設、目的地までの移動の過程に不満を感じ、訪問を中止するといった行為を選択している可能性も十分に考慮しておかなければならないとの認識を示しており、観光地運営側への注意を促している。

「第7章 観光と社会資本（ソーシャル・キャピタル）」では、観光地の振興問題を、地域に住む人々の問題、すなわち地域の活動主体の問題として捉えようとしている。ここでは、昨今英米を中心に注目されている、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の理論を下地として論を展開している。その中で著者は、社会関係資本の実体及びその内容を、ツーリズムの側面から明らかにしようと試みている。

「第8章 観光地振興論」では、第7章の社会関係資本の理論を踏まえて、地域振興の中心問題を、イノベーションという視点を中心にして解明している。

「第9章 観光地ライフサイクル論をめぐって」では、著名な地理学者・観光学者であるR.W.Butlerが提示し、世界的な観光学界で観光理論の中心的命題となるべく注目されている「観光地ライフサイクル論」について、その後の研究動向について詳細に論究し、観光地戦略の土台として著者独自の見解を示している。

「第10章 社会の流動化と観光」では、ツーリズムの今後の動向を考察していくためには、現代社会がどのような動き・変化の中にあるのかを理解する必要があるとの認識から、社会の流動化・モビリティ化の進展という問題を取り上げている。すなわち、「モビリティ・パラダイム論」と呼ばれる所論を中心にして、社会のモビリティ化とは何か、といった命題から解き明かし、現代社会における様々な側面での流動化・モビリティ化を、諸文献によって明らかにしている。また、地域づくりの基礎となる旧来の地域定住主義と対抗するような、現代社会における人々の流動化・モビリティ化が、今後のツーリズムを考察していく上での重要な概念である、との認識を基にして論究している。

「第11章 観光理論のいくつかのタイプ」では、現時点でのツーリズム研究の主要な考え方についての理論的な整理を行い、現代におけるツーリズム研究の諸方向を展望する試みを提示している。

Ⅲ 若干の集約的コメント

1. 本書は、未だ発展途上にある我が国の観光研究において、海外諸論者の見解を丹念にサーベイした研究書であり、その範囲の広さ、内容の幅広さは敬意を表すべきものである。これまでに著者が蓄積してきた他分野での研究成果・研究手法（著者はドイツ経営学の研究分野で数多く

の業績を残している）が、観光という新たな研究対象への取り組みにおいても、十二分に発揮されているといえる。

2. 本書では、経営学や社会学など他の分野で確立されてきた理論を、広く積極的に観光研究にも応用していること、との姿勢が窺われる。例えば、世界的な観光理論のベースの一つとなっているものに、J.Urryなどの再帰的近代化論、すなわち個人化（組織離れ）の理論があり、こうした考え方に基づいて、今や旧来型の「見て廻る主義的なツーリズム」の終焉が起きていることが主張されているのに対して、本書でその意味が解明されている。その上で、現在、新たな地域振興策や国の成長産業の一つとして注目されている観光においても、十分理論的基礎を確立していくことができる、との著者の認識を示している。

またこれまででは、経済的側面を中心に議論されることが多かった地域振興論において、人々の生活・人々の繋がり・社会との関わり、といった観光のもつ独自の価値・効果という視点を導入することによって、観光が持っている経済的側面以外の効果や役割についての議論の発展に、大いに貢献するものである。

さらに、昨今注目されている「社会関係資本」といった概念を取り入れた新たな視点から観光を論じており、単なる理論の世界だけではなく、観光という自由意志に基づく人間的な行動を、人々が生活している現実の社会を意識した視点から分析しようとする意欲的な取り組みであり、本書での議論を出発点とした研究が、観光における他の議論へも応用されていくことが期待される。

3. 本書は、社会が変化していく中で、今後人々の観光行動がどのように変化していくのかについて、社会の流動化・モビリティ化といった視点からも論を進めている。観光は、人々の自由意思による自由な行動をその本質としているが、明治時代以前のように、人々が自由に移動できなかった時代にも、いわゆる観光と考えられる行動は存在していた。そのような時代の観光と、現代社会のように交通機関や情報システムが発達し、人々の移動が制度的にも物理的にも制約がなくなってきた時代の観光が、どのように関連し、どのような意味を持っているのかを考察していくことは、非常に重要である。今日では、交通機関が発達し、国内での日帰り圏が拡大しているだけではなく、近隣のアジア諸国への日帰りも十分可能になってきており、人々の地域社会への意識、あるいは国という枠組みに対する意識は、当然変化してきている。

さらには、インターネット等の情報通信技術の発達により、自宅に居ながらにして世界中の人々と交流し、あらゆる場所をリアルタイムの映像で楽しむことが可能になってきている現状において、観光という世界的な行動の今後を考察していくことは、非常に重要な視点であると考えられる。この点は、本書では「メディア化されたツーリズム」として論じ

られているが、私見としては、上記のようなインターネット等を通じて世界中の名所旧跡、都市を訪問することを仮に‘バーチャル・ツーリズム (Virtual tourism)’と呼ぶならば、これまで一般的に行われてきた、実際に訪問する観光は‘リアル・ツーリズム (Real tourism)’として捉えることができると考えられる。これら両者の間の相互作用が、どのような形で現れてくるのかは、非常に興味深い。すなわち、仮想で訪問体験できたということで、実際の観光行動が減少するのか、あるいは仮想の訪問体験に刺激されて、実際に訪問する観光客が増えるのか、に関する議論も今後必要になってくるかもしれない。あるいは、若干本書の評論を逸脱するかもしれないが、インターネットが発達した社会では、高齢者や障害者、あるいは様々な理由で、海外は勿論、国内観光ですら必ずしも十分に体験できない多くのいわゆる‘観光弱者’にとっても、観光体験の可能性を広げていくことになるかもしれないという点についても、今後の観光研究において注意が必要である。この点に関連して本書では、旧来的観光では男性優位的観点があったことを指摘したうえで、現在では女性配慮的観点など、ジェンダー論を観光分野にも組み入れていくことが不可欠であると主張している。

国や自治体レベルでの観光に関する政策立案、あるいは経営戦略的な発想を発展させていく為にも、本書で紹介されているような理論的枠組みが必要であり、本書の論究は大いに貢献するものである。

何れの章においても、観光研究の先進地域であるヨーロッパや米国での研究を幅広くサーベイし、論究している点において、その成果は十分に評価されるべきものである。

4. 最後に、著者は、今後さらにツーリズム研究を促進していく為の方法論的理論的諸方向を大きく3つに分類して提示している。すなわち、(1) 認識論的原理の違いによる分類、(2) 時代思想的な違いによる分類、(3) 問題のとらえ方の違いによる分類、である。特に(3)では、さらに詳細に9つの理論に分類しており、観光研究におけるこのような方向性による分類を示すことにより、今後研究者が考察していくべき諸課題を明確にしていくといった側面から、非常に重要な貢献であると考えられる。

IV 若干の問題点

1. 著者が指摘しているように、本書は海外における観光諸論に関する文献のサーベイを中心として構成されている。その点において、我が国の観光研究への応用を考えていく際には、若干の調整が必要となるかもしれない。例えば、19世紀末から、ナショナル・トラスト運動などを通じて、民間組織が中心となり、国家の環境保全システムを先導してきた英国や、同じく19世紀末から都市生活者に農園を提供するといった市民農園制度を確立してきたドイツなどの

ヨーロッパ諸国は、伝統的に農業政策、都市政策、国土保全の一環として積極的に農村観光に取り組んできたと考えられる。一方、我が国では、昨今の環境問題や地方の過疎・高齢化問題への取り組みの一つとして、農村観光に注目し始めたのであり、その政策的スタンスが異なっていることは、留意しておく必要がある。確かにこの点について本書では、「観光地ライフサイクル論」もしくは「旧来ツーリズムの終焉論」として論議の対象にされているが、本書においてサーベイ対象となっている諸研究が、我が国の観光とどのように関わりを持てるのかについて、もう少し著者の言及があれば、今後本書を基礎として、観光についての応用を試みる場合の明確な道標となったであろう。海外の諸理論を踏まえた上で、我が国の観光に関する著者の意見を、より積極的に提示されても良かったのではないかと、この思いを抱いた。

2. 本書は、全体で11章の構成となっているが、その全体を貫く中心的な著者の思いや各章間の関連を、構成上の項目立て、あるいは文章により、明確な形で示してもらえれば、最初から最後まで直線的に読み進めることができたのではないかと、この印象を持った。

第1章から第4章、第5章と第6章、及び第7章から第10章との間では、議論の性格が異なっており、章のまとまりを示す表題を付加すること等によって、読者をより正確な理解へと導くことが可能となったであろう。というのも、著者は、観光理論の体系について、① 観光の原理、② 観光の供給、③ 観光の需要、④ 観光事業、⑤ 観光の展望、といった項目で示すことが可能である、と認識しているからである。そのことについて最初に言及していれば、未だ確立していない観光理論の構築という著者の新たな取り組みに、読者も容易に共感していくことができたのではないかと考えられる。

また、第5章、第6章で議論している消費者行動論的な分析は、様々な方面で関心の高い分野であり、場合によっては、その分野だけでも単独の著作が必要なほど、多くの議論が存在するものである。したがって、消費者行動論を観光行動へ応用していこうという、本書における意欲的な取り組みを考えるならば、さらに紙幅を割き、観光客あるいは観光行動に関する別の議論についても、著者の視点から分析・論究していただきたいかった。

3. 本書は、あくまでも理論研究を中心とした研究書であり、実証研究に関しては当初から意図されていない。そのことを十分に承知した上で敢えて申し上げるならば、観光による地域振興などの議論のためには、日本の観光における実態についての言及が若干でもあれば、この思いを禁じ得ない。もしそうであったならば、本書が理論と実践を併せ持つ、より厚みの増した研究となったであろう。その結果、研究者は勿論、実務家も本書を基礎として、観光に関

する実践的な取り組みに繋げていくことができるのではないだろうか。

また本書でサーベイ対象となっている海外文献における実証研究の正確性を確認するためにも、地域観光における先進的、実践的な取り組みを行っている自治体へのインタビューなどにより、いくつかの項目に関して、現状の把握、理論の確認、検証は可能であったかもしれない。

このような望みを抱くのは、著者が毎年長期の海外旅行に出かけており、観光分野における世界的な現状や将来展望について、十分に理解しておられるからである。したがって、そのような経験に基づいた観光における世界観を、理論と実践を併せて、我が国の観光研究への適用可能性へと昇華させていただきたかった。

4. 第11章の結として、著者が提示している観光研究における3分類の [Ⅲ] において、⑦ コミュニティ基盤観光地コラボレーション論、⑧ ツーリズム・コミュニティ論、⑨ 観光地ライフサイクル論の3者は、一つの組織体としての「観光地=コミュニティ」に関する議論を含んでおり、今後の重要な研究課題として大きな一つの枠組みの中での3分類という形式にして、議論しても良いかもしれない。また、② 持続可能ツーリズム論は、確かに多くの論者では一つの有力なパラダイムとされているが、評者としては、これは観光学研究のパラダイムというよりは、今後のツーリズムのあり方や進むべき方向としての基礎となる共通概念や指針的な扱いの方が、他の研究分野を含めた、より幅広い議論に馴染むのではないかと考えられる。

V まとめ

以上、本書の構成と各章における注目すべき特徴、若干の集約的コメント、及び若干の問題点を指摘してきた。しかし当然のことながら、上記のような多少の問題点や今後の議論が必要な点がいくつか存在しているからといって、それらのことが本書の研究的価値を幾分なりとも損なっている、といったことは全く考えられない。本書のように、観光に関するこれほど多くの海外文献を詳細にサーベイし論究した研究書は、これまでほとんど見られなかった。

本書は、観光分野の研究者にとって、貴重な理論的基礎を示してくれるものであり、この分野での研究を進めていく上での有用な資料となるであろう。また、各章で取り上げられている研究分野や研究課題に関しても、そこでの理論的枠組に関する議論をもとにして、さらなる研究発展の契機となることは、疑う余地のないものである。

受付日 2010年10月6日

受理日 2010年10月28日